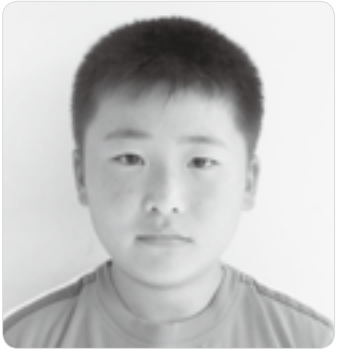
とどけ夢 未来へ
-DREAMING-



海老沼（えびぬま） 操汰（そうた）さん

●天明小学校６年

お父さんのようになりたい

ぼくの家は、建設業の仕事をしています。そして、ぼくの将来の夢は、お父さんと同じ仕事をすることです。お父さんが仕事をしている姿がかっこよく、やってみたいなと思っています。

建設業の仕事に就いたら、いろいろな機械の資格を取って、機械を動かし、お父さんと一緒に、人に喜んでもらえる家やアパートを建てたいです。高校や大学では、建設関係の勉強をしっかり行い、仕事に生かせるようにしたいです。

みんなの広場

市長からのメッセージ

先月、第22回さの秀郷まつりが開催されました。残念ながら台風11号の影響を考慮し、２日目の催しが中止となりました。祭りを楽しみにしていた多くの皆さん、またこの日のために準備をしてきた方たちの気持ちを思うと残念でなりませんが、皆さんの安全安心のため、やむをえない判断であったと思います。しかしながら、初日に行われた多くの催しには、たくさんの方々に参加、また訪れていただき、各会場は大変盛り上がっておりました。

夏祭りも終わり、コスモスが秋風にゆれる頃となりますと、スポーツの秋でございます。「スポーツ立市」を掲げる本市では、市民体育祭をはじめ、多くのスポーツ大会が開催されます。市民の皆さんにおかれましては、さまざまな形でスポーツに取り組んでいただきたいと思います。

また、10月４日から「ねんりんピック栃木２０１４」が開催されます。県内各地でいろいろな種目の交流大会が行われます。本市はゲートボールの会場であり、たぬまグリーンスポーツセンター多目的広場において、全国１６０チームが参加し交流大会が開催されます。「おもてなしの心」で選手の皆さんを迎え、佐野市全体で大会を盛り上げていきましょう。

今月１日から原動機付き自転車等の標識に「さのまる」をデザインしたご当地ナンバープレート「さのまるナンバープレート」の一般交付が始まりました。新規取得並びに交換も可能でございます。さのまるの知名度を生かし、本市の魅力をさらに市内外にＰＲしてまいります。

まだまだ台風シーズンが続きます。ハザードマップなどをご確認いただくとともに、日頃から気象情報に注意し、災害に対する十分な備えをお願いします。

岡部 正英

今回の表紙「新庁舎建設現場夏休み親子見学会」８月２日撮影

８月２日、幼児とその保護者を対象に「親子現場見学会」を開催し、工事説明、現場見学、新庁舎のぬり絵、重機乗車体験などを行いました。

たいへん暑い中での見学会でしたが、普段は近くで見ることのできない重機に乗車でき、参加した子どもたちは、とても喜んでいました。

キラリ★話題の「ひと」

市川竹英（瀧川英夫）さん（高萩町）

〇プロフィール
佐野市生まれ。
１８歳より、今は亡き大出直三郎師に民謡の指導を受ける傍ら、三味線も始めた。その後、高橋竹山と共に旅をした市川竹女に３０余年師事。「越名舟唄」保存会会長。

響き渡る三味線の音色

「20歳の時でした。佐野で行われた、東京の大学生グループによる津軽三味線の演奏公演を見に行きました。自分と変わらぬ年齢の若者たちが、凛として弾いている津軽三味線！その音色に心惹かれました。当時は、周囲に津軽三味線を弾く人はおらず、それなら私が始めようと津軽三味線の名手、市川竹女に師事しました」

こう、語ってくれたのは、市川竹英（瀧川英夫）さんです。津軽地方の厳しい自然の中から生まれた、津軽三味線の繊細な音色に魅せられた仲間たちと共に、昭和54年「喜美英会」を発足させた市川竹英さんは、その会主として幅広く活動しています。

平成９年、平成13年と２回にわたり、市川竹女一門と共にアメリカ公演を行う一方で、平成13年10月には「岩舟山クリフステージ」に立ち、さらに「さの秀郷まつり」にも毎年出演しています。津軽三味線を中心とした活動に加えて、地元民謡・民舞の継承保存に取り組むなど、まさしく地に根を張った活動を展開しています。

稽古場での取材に、時折冗談を言っては、周囲を和ます気配りを忘れない市川竹英さん。三味線を手にしてお弟子さんたちとの曲弾きになると、凛とした面差しになりました。師である市川竹女が伝えようとしたボサマ（門付け芸人の津軽での呼び名）の三味線を、今度は自分が伝えていくという覚悟の眼でした。

９月中旬、中学時代の同窓会席上で恩師や友を前に津軽三味線を披露するそうです。その時の市川竹英さんの胸に去来した思いを、後でそっとお聞きしようか…響き渡る三味線の音色に私も稽古場も包まれていました。

（市民記者　秋山久美子）

お弟子さんたちと曲弾きの練習

佐野弁ばんざい

泥土などにのめり込むことをネコマルという

くぼんだ場所に落ち込むの意に「はまる」という共通語があります。人や物が堀や溝や川（池）の深みなどに突然落ち込んだようなとき、「車が溝にはまった」「川の深みにはまっておぼれた」などといいます。「はまる」は方言のネコマルと意味的によく似ています。でも溝や堀などに落ち込むことは「はまる」といい、泥土などにのめり込むことは「ネコマル」といって区別しています。

湿田や泥土に足を踏み入れると、ぬかるみにのめり込んでしまうことがあります。もがけばもがくほど深く入り込んでしまい、容易に抜け出すことができなくなります。このように泥土などにのめり込むことをネコマルといいます。

「田螺（たにし）を捕（と）ンべとモッテ（思って）、ドンベッタ（一年中水湿が多く泥深い田など）にヘーッ（入って）て歩いていたら、だんだん深くネコマッて出られなくナッチャッて、ヒデーめにあったよ」

車が泥道や砂地でスリップし、タイヤがめり込んで抜け出せないことがあります。そんなとき、無理にアクセルを踏み込むとますますタイヤがめり込んでしまいます。このような状態になることもネコマルといいます。

「バックしたら後輪（こうりん）が泥ン中にネコマッチャッてさぁ、シャーネ（どうしようもない）から、友だちの車で引っ張ってもらったンさ」

ネコマルは「練（ね）り込まる」が変化した語といわれ、泥を練るようにして深みに入り込むという意味です。

（市民記者　森下喜一）